指導者の挑戦 2021

プロサッカー選手・実業家

斉藤誠司さん（34）

現役のプロサッカー選手でありながら、ブラジル・サンパウロ市でスクール事業と選手の代理人業を営む斉藤誠司さん（34）。会社をおこして10年目の現在、「生まれ故郷に恩返しをしたい」と地元さいたま市岩槻区にサッカースクールを作り、ブラジルで成した事業の「分社化」を目指している。「コロナ禍で試行錯誤を続けた」という、2年目の活動を訪ねた。

2月20日、コスタリカの首都サンホセ市でサッカー1部リーグの4月開幕に向けた記者会見に臨む斉藤誠司さん（提供）

契約交渉で培ったノウハウ 事業にして逆輸入

ブラジルのサンパウロ市では、小学年代から育成した選手のプロ契約までを一貫して担う会社「オフィシナ・クラッキ」の代表として知られる。法人名はポルトガル語で「サッカー選手を運ぶ人」という意味だ。18歳以下日本代表、柏レイソルのユースに所属していた16歳の時にブラジルに渡り、18歳でサンパウロFC（U23）からプロデビュー。その後も自らが交渉役となってブラジル国内を渡り歩き、ポルトガル、ポーランドなどの強豪国でもプレーした。それらで培った交渉力が、25歳から始めた代理人業の強みとなっている。また選手として訪れた5カ国で、「大の子ども好き」が高じてスクールを開校。サンパウロ市の「本校」には現在、小学生から大人までの1264人が在籍し、これまで82人の選手をブラジル、欧州のプロリーグ、日本のJリーグでプロ契約させた。2019年にさいたま市岩槻区に作った小学生向けのセジニョ・サッカースクールは6校目にあたる。

マカオのプロチームで選手登録していた昨年、けがの治療を兼ねたオフシーズンの1月には、さいたま桜山中で100人の児童たちを教えていた。「育成と代理人業の両方ができるのは自分の強み」とし、ブラジルで成したビジネスモデルをさいたま市に逆輸入するというビジョンは明確だった。しかし、足場作りの時期にコロナ禍。学校の一斉休校や緊急事態宣言を受け、活動はいったん停止した。世界規模の混乱の中、自身の選手活動もストップ。サンパウロでは日本よりも強力なロックダウンが敷かれ、本社のスタッフからは、軒並み飲食店が廃業するなどの惨状を聞かされた。本校も4月から活動停止となり、月謝を取れずに経営は打撃を受けた。3カ月間は売上ゼロだったが、それでも「ブラジルに渡った時からお世話になり、家族のような人たち」という中心スタッフをはじめ、42人の雇用は守ることができた。

サンパウロは信頼するスタッフに任せ、自分は日本で

サンパウロ市にある「オフィシナ・クラッキ」のサッカー施設で日系人の子どもたちを教える斉藤誠司さん

コロナ禍で選手一人ひとりと向き合う

2月19日、幸手市のヒマラヤ・フットサルパークで小学生の個人レッスンにあたる斉藤さん

の活動に注力すると決めた。全体練習ができない中、「それでもサッカーを教えてほしい」という保護者の要望に応えるため、屋外のフットサル場などで一対一で教える“個人レッスン”に切り替えた。子ども一人ひとりと向き合うと、「キックのインサイド、アウトサイドをちゃんと使えていなかったりで、これを機に丁寧に教えていくことができた」と手応えも。6月には全体練習ができるようになったが、子どもたちの変化が気にかかった。「急にスポーツやサッカーができなくなったことで、情緒不安定となってしまい、スクールの練習に来れなくなってしまった子どもたちがいた」。コロナ禍の世相も鑑み、個別に見ていく活動は続ける必要があると感じた。

個人レッスンはスクール生の小学生が中心だったが、口コミで広まって中高生も来るようになった。2年目の今、さいたま市近隣のフットサル場で87人を教えている。今年2月まで、一人1時間、一日最大10人を見て回った。中にはJチームに入れずともプロをあきらめ切れない社会人選手がいて、そこでは「ガチンコ」で練習相手を努める。同時に代理人としても腕を振るい、昨年末には20代の選手一人をポルトガルに送ってプロ契約させた。

今年3月から、中央アメリカにあるコスタリカ共和国のプロリーグで初の日本人選手として戦う。「現役最後かもしれない」という11カ国目での1年を見据え、「これまでと同じく、一人の人間としてチームに受け入れてもらえるよう努力する」と意気込む。同時期に、サンパウロ州からはこれまでの活動が評価され、「スポーツ栄光賞」を受けた。

来年の22年からは、さいたま市で中学年代のジュニアユースチームをスタートさせる。個別レッスンで教える数人は1期生としての誘いを受けてくれた。U-18までチームを揃えられれば、いよいよ、育成からプロ契約までを一手に担う「オフィシナ・クラッキ」となる。